

雅ねえの、みんなで取り組む

獣害対策講座 Vol.5

※タイトルに記載している『雅ねえ』の表記は、本人の原稿どおりで掲載の了承を得ています。

おさららいと予習

暑中お見舞い申し上げます。この季節、暑さに弱いイノシシは昼夜逆転させてるから、イノシシは夜行性って思ってる人が結構多い。違うから電柵は昼も夜も通電だよ。

前回

前は竹林、ササ藪って林縁部の低木とセットでシカやイノシシの棲み家になっちゃうよ、動物が安心できない程度に管理しようねってお話しだけど、家や畑の周りの竹林とか見直してくれたかな？

今回

今回は、今まであまりにも知られなさ過ぎた牧草の話。イノシシやシカだけでなく、クマ、サル、キツネまで牧草のイタリアンライグラスさえあれば他に餌なんかなくてもそこに住み着いちゃうし、どんどん増えるってお話だよ。

内輪の会議

ここはとある集会所。数年前の真夏の昼下がり。配られた資料を前に、みんな、暗い表情。集まっているのは獣害

対策と畜産関係の行政担当者、団体職員さん。

団体職員のAさん

「こんな資料、表に出したら畜産農家が悪者になってしまふ、出さない方向で何とかできないのか？」

同じ団体職員のBさん

「確かに大変な話だけど、隠すよりは一気に公表して対策を進めた方が、経営改善のきっかけにもなるのではないか？」

私(雅ねえ)

「なかなか一気にとはいきません。客観的なデータを示しても、『面積が大きいから無理』、『機械が使いにくくなるから出来ん』ってやりもしないで最初から否定される農家さんも多いですから。けれどやった農家さんは、面積は減ったけど収量は増えたとし、イノシシも見なくなつた、採草地ポコポコにされることもなくなつたって言うてくれます。一戸ずつでもいから理解してくれる農家さんを地道に増やすしかない、けれどさつきおっしゃった経

営改善のきっかけには絶好のチャンスかもしれない。」

行政担当者Cさん

「また、あちこちで怒られるか(笑)、けど現に、獣害対策がきっかけで改植や新植がすすんで元気になった柑橘産地やら休耕田復活させた水田の法人もいっぱい出て来てるし、畜産もいい機会かもしれないね。それにクリの叢生栽培も同時に対策考えて地域をかえていくみたいなの取り組みにしたいなあ。」

内輪の会議の中身

会議の元の配布資料。一つは、ある採草地のイノシシは一年間を通して、採草地のイタリアンライグラスが主食、その採草地の牧草の収量は平均的な収量のおよそ半分というデータ。もう一つはシカ、イノシシの出没する畜産地帯では牧草生産量の20〜60パーセントが収穫前にシカやイノシシに食われているというデータ。

そしてそうした地域では、平均して、採草地一ヘクターでシカなら46頭、イノシシなら30頭を放飼しながら、食

い残された牧草で牛を飼育しているというデータ。

しかも、イタリアンライグラスは寒地型牧草で冬も春も生育がよく、これを食ってる出産期のシカ、イノシシの雌の栄養状態は極めて良好。

つまり、囲いをしないヘクターの採草地では、常に46頭のシカか30頭のイノシシを飼育していて、半数が雌なら周囲に23頭のバンビが75匹のウリ坊を毎年地域に放出し続けていることになる。

放牧地に行ってみたら、夜は牛が寝そべってる横でイノシシの家族が牧草をクチャクチャ食べたり、ウリ坊がはしゃぎまわったり。

その上、食い物に困らないから捕獲檻のコメ糠などの餌なんか見向きもしない。

そういう事実をどう伝え、対策をどうするのかというのが会議の中身。

対策自体は意外と簡単

「とにかく一歩ずつ、優良事例作って少しずつ理解してもらおうしかないですね。」

さっそく、「シカが牧草を食う、イノシシは採草地を掘り返してポコポコにするから